ヘーゲルの政治経済学の研究

尼　寺　義　弘

序[1)]

『法の哲学』第189節への注解において，ヘーゲルは「国家経済学（Staatsökonomie）」についてつぎのように述べている。

「国家経済学[2)]は，これらの観点〈すなわち市民社会における主観的な諸欲求とこれらの諸欲求の満足とはいかにして実現されるか，そしてこれらの関連を律する諸法則とは何であるか〉[3)]から出発するが，さらにもろもろの集団の関係と運動とをそれらの質的かつ量的な規定性と錯綜性において説明すべき学である。これは近代を地盤として，近代において成立した学問の一つであり，その発展は，思想が（スミス，セー，リカードを見よ）さしあたりその目前にある無限に多数の個々のものから，ことがらの単純な諸原理，すなわちことがらのうちに働いていて，ことがらを支配している悟性を，いかにして見つけ出すかという興味ある過程を示している」[4)]。

さらに同じ節への「追加（Zusatz）」においてつぎのような定式化が表明される。

「しかし恣意のこうした蠢動〈すなわち市民社会における諸欲求とそれらの充足との恣意性〉は，それ自身のなかから普遍的な諸規定を産み出すのであって，この一見ばらばらで無思想に見えるものが，おのずから生じる一個の必然性によって支えられるのである。ここでこの必然的なものを発見することが国家経済学の目的であって，国家経済学は，大量の偶然事にかんしてもろもろの法則を見いだすのであるから，思想の栄誉になる学である」[5)]。

われわれは以下の順序でヘーゲルによる政治経済学の把握を分析することにしよう。

序
Ⅰ　欲求―労働―享受の推理論
Ⅱ　直観と概念の弁証法
Ⅲ　道具，機械そして機械的労働の鈍化
Ⅳ　全面的な依存性の体系
Ⅴ　市場経済―価値，価格そして貨幣
むすび

Ⅰ　欲求―労働―享受の推理論

労働は，土地（自然）とならんで，市民社会の富の源泉として黎明期の経済学および古典経済学の中心概念である。すでにトーマス・ホッブズは『リヴァイアサン』においてつぎのように述べている。

「コモン−ウェルスの栄養は，生活に役立つ諸素材の豊富と分配にある。すなわち，それらの作成または調製と，（作成されたばあいに）便宜な諸通路によってそれらを公共の使用へ輸送することにある。……この栄養の物質は，動物，植物，鉱物からなっていて，神はそれらを，われわれの前に，大地のなかや表面ちかくに，おしみなくおいたので，それらをうけとるための労働と勤勉のほかには，何も必要ではないのである。それで豊富（Plenty）は（神の恩ちょうについては）人々の労働と勤勉（labour and industry）に全く依存しているほどである」[6)]。

ディヴィド・ヒュームも『政治論文』において「この世に存するものは，すべて労働によって取得されます。そして，われわれの情念（pas-

無断転載禁止

sions）がそのような労働の唯一の原因です」[7]と述べている。

アダム・スミスも『国富論』において，「労働はあらゆる事物に対して支払われた最初の価格，本源的な購買貨幣であった。この世のあらゆる富が本源的に取得されたのは，金やあるいは銀によってではなくて，労働によってであった」[8]。

ヘーゲルもそれに対応するが如く，『法の哲学』の第196節においてつぎのように述べている。

「労働は自然によって直接に提供された素材を，これらの多様な目的のために，きわめて多種多様な過程を通して種別化（spezifiziert）する。だからこの形成（Formierung）は，手段に価値と合目的性を与えるのであって，その結果，人間が消費においてかかわるのは主に人間の生産物であり，人間が消費するのはこうした努力の産物である」[9]。

さらに同じ節の「追加」において，「人間の汗と人間の労働が，欲求を満たす手段を人間のものにしてくれるのである」[10]と述べている。

若きヘーゲルもまた『人倫の体系』[11]において明示的な如く，以上のような労働に基礎をおく政治経済学の認識より出発している。ヘーゲルはかくして市民社会の概念を厳密に確定するために，彼の哲学的な論究のなかにイギリスの政治経済学を取り入れた最初のドイツ古典哲学者であったといえる。ヘーゲルの政治経済学への志向性は，彼が経済的な諸連関，すなわち，労働，人間の欲求，そしてこれらの欲求の労働による充足を，社会の根本的な連関として理解していたことを意味する。

『人倫の体系』において，ヘーゲルは，欲求，労働，享受という個々の人間の主観的な活動を実践的な生の運動としてつぎのように特徴づけている。すなわち欲求は特殊性の地位を，労働は普遍性の地位を，そして享受は個別性の地位を受けとるところの一つの推理形式として論究するのである[12]。この推理形式によってヘーゲルは市民社会の普遍的な基礎を，それらの根本的な連関を理論的にそして論理的に把握したといえる。この推理において労働が普遍性の位置を占め，欲求と享受という二つの項を全体へと結びつける媒辞をなしている。さらにこれらの側面をよりくわしく検討していこう。

II　直観と概念の弁証法

『人倫の体系』において，ヘーゲルは労働を人間的自然に対する，そしてまた理性に対する直接的な関連のなかへ定立する。この関連のなかで人間的自然は直観として，理性は概念として反照している。まず直観の本質について論じよう。

ヘーゲルは直観を，一般的に，客観的感情として，類的感情として規定する。たとえば空腹（Hunger）がそれに数えられる。とはいえこの感情にあってはただ抽象一般のみが，すなわち空腹それ自体のみが問題となっている。現実には空腹は欲求と充足との矛盾として，二つの側面の対立として存在しているのである。この規定においてのみ空腹は諸個人にとって真実なものである。欲求と享受というこの感情の二つの側面は具体的には労働および労働の結晶としての道具によって結びつけられる。というのは欲求としてのこの感情は労働によってのみ享受において満足させられるからである。ヘーゲルはこの関係を「感情が概念を包摂する」[13]と表現している。

直観と並んで，ヘーゲルは第二の規定として概念を仕上げていく。人間は彼の理性と思惟によって概念に合致する。すなわち人間はまず主観的なものとして現象し，そしてこの規定において彼は直観の下へ，すなわち労働という客観的な諸関連の下へ包摂される。とはいえ人間はこの連関をこえて，彼自身，経済と労働との創始者であり，したがって直観あるいは労働は人間の生産物であり，そのかぎりで直観あるいは労働は「概念の下へ包摂される」[14]。

とはいえこれらの諸カテゴリーは最終的にはそれ自体抽象であるにすぎない。現実には，生

無断転載禁止

においては，全体が，統一が，客観的なもの（直観）と主観的なもの（概念）との同一性が，あるいはまたそれら自体の相互包摂の関係が存在する。かくして全体が全体として考察されねばならない[15]。

まず一方で，欲求，労働，道具，享受というモメントをもつ直観が表現され，他方で，労働の主体としての理性をもった人間が表現されるべきである。その際，アクセントは客観的側面に，直観におかれるべきである。というのはヘーゲルはここで始めて人倫の理論をその基礎から展開しているからである。すなわちこの基礎を彼の分析の出発点となし，そしてつぎの成果へと到達していくのである。労働は第一の，根本的な経済的連関である。そこから彼は社会の編成を，家族，身分，国法等々を展開する。つまり人倫の体系を開示していくのである。人倫の体系において，現実性と観念性とが，客観性と主観性とが，直観と概念とが，互いに区別されているのであるが，しかしながら真実においてはそれらはつねに同一性を，統一をなしているのである。というのも，たとえば，労働そのもの，あるいは概念なしの直観というものは，存在不可能なことである。同様に，逆にいえば，主体もまた，直観なしの概念そのもの，あるいは労働なしの概念というものは，思惟されえないものであるからである。かくして現実には両者は全体として統一をなして存在しうるものである。ヘーゲルはここで両者を区別し，それぞれの側面を明らかにする分析的方法より，両者の現実の全体の関係を統一的に考察する総合的方法へ，弁証法的方法へと移行しているといってよいであろう[16]。

III 道具，機械そして機械的労働の鈍化

欲求―労働―享受という三項関係のなかで，われわれはまず媒辞である労働に着目して考察をすすめていこう。欲求と享受とのあいだに，これらの直観の媒辞として労働あるいは道具が存在する。道具は客体へと生成する理性を体現する。ヘーゲルは述べている。「主体は道具において自己と客体とのあいだに媒辞をつくる」，すなわち主体が加工する対象とのあいだの媒辞をなしており，「そしてこの媒辞が労働の実在的な理性性である」[17]。「道具のもつ理性性のために，主体は媒辞として存在し，そしてそれは労働することよりもより高位である，それと同じように，（ここで問題となっている享受のために）加工された客体よりも，そして享受あるいは目的よりもより高位である。そしてそれゆえに自然のポテンツにあるあらゆる民族もまた道具をきわめて高く尊んだのである」[18]。

人間はこの推理あるいは労働の過程において，自己すなわち主体と対象とのあいだに道具を差し入れ，それを働かせる。この意味で労働過程では主観性の急速な消耗が止揚されるところの，あるいは消耗の度合いが緩和されるところの理性の「狡智」が重要となる[19]。

ところで分業の発展は労働のスタイルを一変させる。というのは，「対象に全体として立ち向かう労働が自己自身において分割されており，個別の労働となっており，そしてこの個別の労働は，多様性ということが自己から排除され，かくして労働それ自体がより普遍的なものとなるとともに，全体性に疎遠なものとなっているというまさにそのことのゆえに機械的な労働となっている」[20] からである。「そして主体的なもの，概念の不静止（Unruhe）が，それ自体主体の外部に定立されることによって，道具は機械へと移行するのである」[21]。

ヘーゲルはここで，明らかに，1760年代に始まり，マニュファクチュアの時代を終えたイギリスの産業革命を反省している。機械の働きによって生産物は増加し，それは個人の欲求をこえて，「剰余（Überfluß）」となる。「生産物の使用に対する関連はそれゆえに普遍的な関連である」。すなわち剰余は「他人の使用に対する」[22] 関係，すなわち他人の欲求の充足に関係するものとなる。

分業の発展と機械の投入は一方で生産力を急

無断転載禁止

激に上昇させる。しかし他方で抜きがたい困難をかもしだすこととなる。ヘーゲルは機械的労働の性格を注目すべき仕方で描写している。分割された，個別の，あるいは，単純な労働は，過程の全体から労働者を切り離す。彼の労働は単調な，退屈な労働，鈍化させられた労働となる。一言で云うならば，疎外された労働となる。どうすればこの深刻な問題が解決されることになるのであろうか。

ヘーゲルはこの問題に対してつぎのように答えている。

「機械的労働のこの鈍化ということには，しかし直接にその労働から完全に自己を分離する可能性がある。というのは労働は多様性のない全く量的なものであるからである」[23]。

量的な，単純な活動は機械によって取り代えることができる。同じ言明が，『イエーナ体系草稿』[24] にも，『法の哲学』第198節[25] にもみられる。

この機械化には人間の解放の可能な基礎がみられる。これに対してアダム・スミスは機械による機械的労働の代替という厳密な考え方をもってはいない。もちろん彼も民衆の教育の必要性を強調している。

「民衆の教育」すなわち「政府が何らかの防止の労をとらないかぎり」，分業は「知的な，社会的な，また軍事的な美徳を」破壊する[26]。スミスの教育理論とヘーゲルの機械理論との関係についてはさらに厳密に論究されるに値するが，本稿では問題を指摘することにとどめる。

Ⅳ　全面的な依存性の体系

Ａ・スミスは『国富論』においてつぎのように述べている。

「分業がひとたび完全に確立されると，人が自分自身の労働の生産物によって満たすことのできるのは，彼の欲望のうちのごく小さい部分にすぎなくなる。彼は自分自身の労働の生産物のうち自分自身の消費を上回る剰余部分を，他人の労働の生産物のうち自分が必要とする部分と交換することによって，自分の欲望の大部分を満たす。このようにして，だれでも交換することによって生活し，いいかえると，ある程度，商人となり，そして社会そのものも，まさしく商業社会とよべるようなものに成長するのである」[27]。

商業社会はかくして全面的依存性の体系として成立する。ヘーゲルによれば，いずれの個人も市民社会の一成員として，「私的人格」[28] として行動する。各個人は，たとえば，商人として，工場主として，あるいは，手工業者として貨幣利得の可能性を追求していく。個人は彼の判断と見積りにしたがって行動し，自立的な人格として登場する。市民社会の私的人格は貨幣利得のために多くのエネルギーを傾注する。彼は冷徹な計算高い仕方で行動する。彼は他人に対して何の考慮を払うこともなく，互いに無関心である。彼らは互いに冷ややかな他人という関係にある。市民社会においては家族における如き「愛」は存在しない（§158）[29]。各人は利己的な個人として，あるいは，私的人格それ自体として振る舞っている。けれども各人格はこの社会の掟を，一定の規則をうけ入れねばならない。それは経済法則である。各人はその法則に服せられる。われわれはこの法則を論究することにしよう。

Ⅴ　市場経済―価値，価格そして貨幣

はじめに市場をめぐる「剰余」の価値についてみることにしよう。剰余の生産物の所有者は市場へと歩を進める。とはいえこの剰余がいずれも直ちに販売される保証は全くない。ヘーゲルはつぎのように述べている。

「彼が占有する剰余が，彼にとって，満足の総体性であるかどうかは，彼が如何ともなし難い無縁な力（eine fremde Macht）に依存する。その剰余の価値，すなわち剰余と欲求との関連を表現するところのものは，彼から独立していて，そして可変的なものである。

無断転載禁止

この価値そのものは，欲求の全体と剰余の全体とに依存する。そしてこの全体が認識されることのほとんどない，盲目の，見積り不能な力（eine wenig erkennbare, unsichtbare, unberechenbare Macht）であるのは，この力が量に関しては無限に数多な個別性の総計であり，質に関しては無限に数多な性質からの合成だからである。個別的なものからなる全体に対して個別的なものが働きかけるとともに，全体は再び観念的なものとして個別的なものに働きかける。そして，こうした交互作用が価値を決定するものであり，この交互作用は波濤のようにたえず上に下に起伏するのである」[30]。

以上のように，ヘーゲルは市場経済の構造とそれを貫く価値の波動について述べている。この記述は，本稿の序ですでにみたように，『法の哲学』の「国家経済学」の「学問」としての成立条件を想起させる。すなわち無限に多数の個別の集団よりことがらの単純な原理を導きだすことである。それは現象を支える必然性，経済法則―悟性の働き―を明らかとすることである。『人倫の体系』の以上の記述はのちの学問としての政治経済学の受容を予感させるものである。

市場はかくして個別とは「無縁な力」，「認識されることのほとんどない，盲目の，見積り不能な力」によって支配されている。「この体系において統治するもの（das Regierende）は諸欲求とこれら欲求の各種の満足の仕方との無意識的で盲目の全体として現象する。しかし，普遍的なもの（das Allgemeine）はこの無意識的で盲目的な運命を捕えることが出来なければならず，そして統治となることが出来なければならない」[31]。

この記述は一方で，価格変動をひきおこす「統治するもの」すなわち価値法則の働きと他方で，「普遍的なもの」すなわち「統治」あるいは政府の役割を明示している。これはのちの『法の哲学』の「ポリツァイ」および「コーポラティオン」[32] へと連動するものである。すなわちヘーゲルは剰余と欲求の関係の均衡の問題についてつぎのように述べている。

「正しい均衡（das richtige Gleichgewicht）が，一部は，取るに足りない動揺の下に自己を維持し，一部は，もしその均衡が外的諸事情を通じて一層強く撹乱されているときは，より大きい動揺を通じて自己を回復する，ということは，自然によっておのずから生起する。しかし，まさに後者の場合には，統治（die Regierung）は，経験的な諸偶然性を通じてこうした均衡を失する動きを作り出す自然に対して対抗しなければならない」[33]。

ヘーゲルはこのように市場（自然）のもつ自動的な価格調整メカニズムについて述べている。この記述はA・スミスが『国富論』第１編，第７章で論じた「自然価格」と「市場価格」の概念を想起させる[34]。とはいえヘーゲルにはこれらの二つの概念の区別もなく，すべて「価値」タームで市場価格の変動と中心価格について論じているのである。彼は明らかにスミスを読み込みながら，なぜ「価値」タームのみで論じるのであろうか。

ヘーゲルによれば，剰余と欲求との「正しい均衡」が「静かなる媒辞（die ruhige Mitte）」[35] として，――自然価格として自己を維持する。けれども，つぎのようにヘーゲルが述べるとき，彼はスミスを越えているといってよい。もしも自然がこの「静かなる媒辞」を破棄する場合には，政府が「同じ静かなる媒辞を，そして均衡を固守し」[36] なければならない。この視点は「ポリツァイ」および「コーポラティオン」へと結びつくのである。

市場における価値変動の分析から離れて，最後に『人倫の体系』における価値，価格，貨幣の概念について簡単に触れておくことにしよう。個々人の欲求の満足は剰余の交換において，そして所有者としての相互の認知という仕方で実現される。剰余生産物の各所有者は市場で他の所有者に対して同じ権利をもった者として互いに向かいあう。彼は他人によってパートナーとして認知されたものとして尊ばれる。この相互の認知において占有は所有となる。「所有に

無断転載禁止

対する権利は権利に対する権利である」[37]。所有に対する権利はかくして市民社会における第一の権利である。ヘーゲルは述べている。

「この権利の純粋な無限性，この権利の不可分離性が，物という特殊的なもののうちに反映されると，一つの物の他の物との同等性（Gleichheit）となる。そしてこの一つの物と他の物との同等性という抽象態，具体的な統一と権利とは価値（Werth）である。あるいは，むしろ価値そのものが抽象態としての同等性であり，観念的な尺度である。実際に見出された経験的な尺度は価格（Preis）である」[38]。

以上のように物の価値は物の所有という基本的な権利と権利との関係として，ある物と他の物との「同等性という抽象態」において論ぜられる。これまで検討してきた　欲求―労働―享受　という三項関係における「労働」と物の，したがって商品の価値との結びつきについては「労働および生産物の価値および価格はすべての欲求の普遍的な体系にしたがって自己を規定する」[39] と述べており，欲求の体系のさらなる検討を要する。

貨幣についてヘーゲルはつぎのように述べている。

「剰余が，普遍的なもの，すべての欲求の可能性として無区別へと定立されたものが，貨幣（Geld）である。それは剰余に向かう労働が，機械的で単調であるが，同時に普遍的な交換の可能性，すべての必需品を獲得する可能性へと向かうのと同様である。貨幣が普遍的なもの，すべての必需品の抽象態であり，すべての必需品を媒介するものであると同様に，商業（Handel）はこの媒介作用を活動として定立されたものであり，それは剰余と剰余とを交換させる」[40]。

さらにヘーゲルは「誠実なる身分」においてつぎのように述べている。

「労働の普遍性あるいはすべての労働の無区別が，それですべての労働が比較しあい，そしてそれに各個別者が直接に転化しうる，そうした労働の媒辞として，実在的なものとして定立される，それが貨幣である」[41]。

以上のように，ヘーゲルは貨幣をあらゆる商品がそれに向かうところの「普遍的な」交換能力とみており，その能力の基礎を「労働の普遍性」に求めている。したがって貨幣は「労働の媒辞」であり，貨幣を単なる一般的な交換手段として位置づけてはいない。

むすび

ヘーゲルは自己の推理形式，個別―特殊―普遍，を道具として具体的な諸関係を分析する。なかでも市民社会の分析はこの推理論によっている。さらに彼は人間の生の諸条件，とりわけ経済的諸条件をこの推理形式によって明示的なものとしている。推理の核心は「実在的なものとしての」[42] 媒辞にある。本稿で論究された経済的諸関係においては，両項―たとえば欲求と享受―を媒介するものが媒辞である。この媒辞として労働，道具，機械があげられている。ヘーゲルは市場経済の諸法則においても，A・スミスがそれを展開したように，運動と媒介の中心を，主軸を，「静かなる媒辞」として価値変動の中心をあげている。したがって運動と媒介の中心をなすものは，労働および道具であるだけではなくて，価値および貨幣でもある。価値は，既述の如く，波濤のように絶えず上に下に起伏するものの「静かなる媒辞」として取り上げられている。貨幣もまた「実在的なものとして」，労働という普遍性の現実的な媒辞として考案されているのである[43]。

注

1）本稿はクロアチアのザグレブ大学で開かれた「国際ヘーゲル学会」（2000年８月30日―９月２日）で，「Hegel und die politische Ökonomie」というテーマで発表した学会報告を骨子としている。

2）強調符号…は，原文がイタリック体あるいは大文字であることを示している。

3）括弧記号〈　〉は引用者の補足である。

4），5）G.W.F. HEGEL, *Grundlinien der Philosophie*

無断転載禁止

des Rechts, in: Werke in zwanzig Bänden, Band 7, Frankfurt a.M. 1970, S. 346 f. 藤野渉・赤澤正敏訳『法の哲学』・世界の名著 35『ヘーゲル』所収，中央公論社，1967年，422ページ。

6）THOMAS HOBBES, *Leviathan or the matter, forme and power of a Commonwealth ecclesiasticall and cicil*, Basil Blackwell Oxford, 1960, p. 161. 水田洋訳『リヴァイアサン』（二）岩波文庫，1996年，137ページ。

7）DAVID HUME, *Political Discourses*, Edinburgh, 1752, p. 12. 小松茂夫訳『市民の国について』（下）岩波文庫，1982年，17ページ。

8）ADAM SMITH, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, W. Strahan and T. Cadell, London, 1776, Vol. I, p. 36. 水田洋訳『国富論』〈上〉，河出書房新社，1974年，32ページ。

9），10）G.W.F. HEGEL, *Grundlinien der Philosophie des Rechts*, a.a.O., S. 351. 藤野・赤澤訳『法の哲学』428ページ。

11）G.W.F. HEGEL, *System der Sittlichkeit*, in. Gesammelte Werke, hrsg. Manfred Baum und Kurt Rainer Meist, Band 5, Hamburg, 1998. 上妻精訳『人倫の体系』以文社，1996年。

12）Ebd., S. 281 ff. 同上訳書16ページ以下参照。

13）Ebd., S. 282. 同上訳書17ページ。

14）Ebd., S. 284 ff. 同上訳書21ページ以下参照。

15）Ebd., S. 290 ff. 同上訳書33ページ以下参照。

16）Y. NIJI, *Die Kategorien Anschauung und Begriff im „System der Sittlichkeit“ bei Hegel in Bezug auf die politische Ökonomie*, in: THE HANNAN RONSHU, Humanities & Natural Science, Hannan University Osaka, Bd. 27, Nr. 1, 1991.

17）G.W.F. HEGEL, *System der Sittlichkeit*, a.a.O., S. 291. 上妻訳『人倫の体系』35ページ。

18）Ebd., S. 292. 同上訳書36ページ。Gleiche Äußerungen gibt es in der *Wissenschaft der Logik II*, in: Werke in zwanzig Bänden, Band 6/II, S. 453.

道具という労働手段の優位性についてはヘーゲルのつぎの文献を参照されたい。武市健人訳『大論理学』下巻，岩波書店，1962年，244-245ページ。

拙稿「ヘーゲルの『理性の狡智』と目的活動」『阪南論集 人文・自然科学編』第34巻第４号，1999年，所収，参照。

19）G.W.F. Hegel, *Jenaer Systementwürfe III, Naturphilosophie und Philosophie des Geistes,* Neu hrsg. Rolf-Peter Horstmann, Hamburg, 1987, S. 189 ff. 尼寺義弘訳『イェーナ精神哲学』晃洋書房，1994年，22ページ以下参照。

20）G.W.F. HEGEL, *System der Sittlichkeit*, a.a.O., S. 297. 上妻訳『人倫の体系』45ページ。

21）Ebd., 同上訳書46ページ。

22）Ebd., S. 297 f. 同上訳書同ページ。

23）Ebd., S. 297. 同上訳書45ページ。

24）G.W.F. HEGEL, *Jenaer Systementwürfe III*, a.a.O., S. 206 f. 尼寺訳『イェーナ精神哲学』55-56ページ。

25）G.W.F. HEGEL, *Grundlinien der Philosophie des Rechts*, a.a.O., S. 352 f. 藤野・赤澤訳『法の哲学』428-429ページ。

26）A. SMITH, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, a.a.O., Vol. II, p. 366 f. 水田洋訳『国富論』〈下〉201ページ。

27）Ebd., Vol. I, p. 27. 水田訳『国富論』〈上〉26ページ。

28）G.W.F. HEGEL, *Grundlinien der Philosophie des Rechts*, a.a.O., S. 343 ff. 藤野・赤澤訳『法の哲学』418ページ以下参照。

29）Ebd., S. 307 ff. 同上訳書386ページ以下参照。

30）G.W.F. HEGEL, *System der Sittlichkeit*, a.a.O., S. 350. 上妻訳『人倫の体系』143-144ページ。

31）Ebd., S. 351. 同上訳書144-145ページ。

32）G.W.F. Hegel, *Grundlinien der Philosophie des Rechts*, a.a.O., S. 382 ff. 藤野・赤澤訳『法の哲学』462ページ以下参照。

33）G.W.F. Hegel, *System der Sittlichkeit*, a.a.O., S. 351. 上妻訳『人倫の体系』145-146ページ。

34）Ａ・スミスは「自然価格（the natural price）」についてつぎのように述べている。

「したがって，自然価格はいわば中心価格（the central price）であって，それへ向かってすべての商品の価格が，たえず引き寄せられているものである。さまざまな偶然の事情が，ときにはそれ

無断転載禁止

らを，自然価格のずっと上に，つりあげておくかもしれないし，ときにはそれのいくらか下に，おしさげることさえあるかもしれない。しかし，それらがこの休息と持続の中心におちつくこと（settling in this center of repose and continuance）を，さまたげる障害がなんであるにしても，それらはたえず，それに向かっているのである」（A. Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, a.a.O., Vol. I, p. 70.　水田訳『国富論』〈上〉55ページ）。

35），36）G.W.F. HEGEL, *System der Sittlichkeit*, a.a.O., S. 352.　上妻訳『人倫の体系』146ページ。

37）Ebd., S. 298.　同上訳書47ページ。

38）Ebd., S. 300.　同上訳書51-52ページ。

39）Ebd., S. 337.　同上訳書118ページ。

40）Ebd., S. 304.　同上訳書57-58ページ。

41），42）Ebd., S. 337.　同上訳書118ページ。

43）Y. NIJI, *Hegels Theorie vom Schluß — eine wichtige wissenschaftliche Quelle für Marx' Theorie von der Wertform*, THE HANNAN RONSHU, Humanities & Natural Science, Vol. 27, No. 2, 1991.

（2000年12月25日受理）

無断転載禁止